

# 特 中学校 集 No.2

## 気づきをつむいで



西宮市立高須中学校  
教諭 よねかわ 米川 ちあき 千秋

### 1 はじめに

本校は西宮市南東部の海浜部に林立する武庫川団地の中にある。全生徒が武庫川団地から通っており、団地の歴史とともに開校27年の歴史を刻んできた学校である。開校当時は全国各地の言葉が飛び交い、不思議な異空間だったという話も聞く。つまり様々な生活習慣や価値観を持った人々が生活している地域であったといえる。また近年、武庫川団地への外国人居住者が増え、入学あるいは転編入してくる日本語指導が必要な生徒への対応が、新たな課題となってきた。

日本語指導が必要な生徒の入学・転入は2000年頃から始まっている。中国を中心に、フィリピン、ブラジル、ペルーなどの国から来日している。来日の理由は、保護者の就労、国際結婚によるものが多く、子どもが置かれている状況は非常に複雑な場合もある。

そんな彼らを受け入れる学校側の体制は、必要に迫られる形で進められてきたといえる。

### 2 学校体制

#### (1) 学習支援

日本語指導が必要な生徒の受け入れ体制ができていない中、手さぐりの状態で支援の方法を探っていった。現在では子ども多文化共生サポーター、生活・学習相談員、西宮市国際交流協会の日本語教室など、様々な支援体制をとっている。来日してからの期間や、日本語理解の状況によって対応は違ってくる

が、近年は小学生になってから来日しているケースが多く、日常会話はできるが学習言語で苦勞している生徒が目立つ。

#### (2) 共通理解

日本語指導が必要な生徒への対応は、当該学年が中心となるが、本校は小規模校のため他学年の教師も教科指導を行っている場合が多い。そのため全教師への共通理解を促すために、基礎情報シートを作成している。いつ来日したか、家庭環境、日本語理解の程度、保護者の考えなどを記入したシートを作成し、パソコン上で共有している。関わった教師が「気づき」を記録し、本校の教師の誰もが、いつでも見られるシステムになっている。

日常会話ができるようになると、生徒に対する教師側の問題意識が、ともすればそれまでよりも薄れてしまうことがある。しかし、生徒は、日本での生活に慣れれば慣れるほど、別の問題に直面していることもあるので、このシステムは教師側の意識を持続するために役だっている。

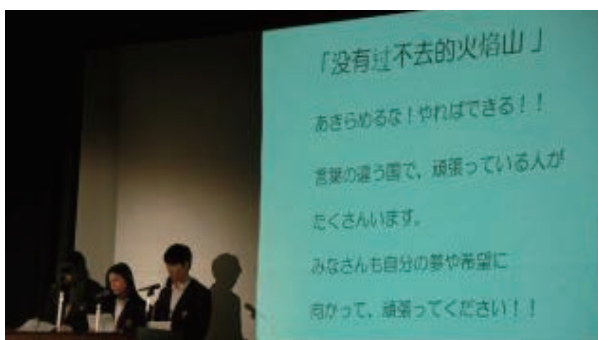
#### (3) 職員研修

日本語指導が必要な生徒を受け入れて最も困難に感じることは、「進路」と「他の生徒との関係づくり」である。特に学習言語の習得が不十分な生徒にとっては、高校受験が大きな壁となる。

そこで、先進校の取組を学び、進路を実現するためにどういう道筋があるか、また他の生徒とのコミュニケーションを円滑にするためにはどのような手立てがあるのか、などについて

学んでいった。また、その学びの中から、日本語指導が必要な生徒が活躍できる場を意図的につくることなども試みた。それが「文化活動発表会」における「国際理解発表」である。

発表では、それぞれの生徒の母国の文化を紹介したり、今の心情を作文にして読んだりした。その取組の過程の中で、担当者から「クラスでは見られないような元気な表情でやっている」という報告があった。似た環境の者同士、母国語で話したり、気がねや遠慮なしに自由に話せたりする場が、彼らを元気にしているのだという気づきがあった。これが「多文化研究会」の発足へとつながっていった。



▲ まだ不慣れな日本語による母国の紹介

### 3 居場所づくり

#### (1) 気づきから「多文化研究会」発足へ

日本語指導が必要な生徒の中には、様々な手を尽くしても、時間の経過とともに集団の中に埋もれ、進路に立ち向かうエネルギーを持てなくなったり、休みがちになったりする者も少なくない。担任をしていても正直なところ限界を感じることもあった。

そんな時、「文化活動発表会」での取組の様子を見聞きし、彼らが学校の中でほっとできる、自分らしくいられる居場所が必要なのではないかという考えに行きついた。

私たちは彼らを早く日本の学校に慣れさせ、日本語が少しでもわかるようにと、そればかりに必死になっていた。できない、わからないことばかりに目を向けていたのである。彼らの育ちや学校の中の居場所、家族の中での微妙な気持ちや自分自身のルーツにつ

いてなど、生徒自身のアイデンティティに目を向けられずにいたのである。

#### (2) 「多文化研究会」

「多文化研究会」は部活動の一つとして位置づけ、週に一回活動している。メンバーは外国籍生徒や、外国にルーツを持つ生徒及び関心を持つ日本人生徒である。活動内容は基本的には話しあって決めるが、文化活動発表会での発表や、外国料理を作ることなどのイベント活動に取り組むとともに、自主学習も行っている。西宮市の生活・学習相談員の通訳の方にも協力していただき、保護者と担任のパイプ役を果たしてもらっている。



▲ 多文化研究会の願い

#### (3) 本音の語れる場所

誰よりも明るく、部長を務めるブラジル籍の女子生徒の表情がいつになくさえない。欠席も増えている。どうしたのか問うと、「今は何も言われなくても、いつかまた誰かが言いたすんじゃないかと思うと急に怖くなる」と打ち明けた。

小学校で来日し、慣れない片言の日本語を話していたころ、からかわれた辛い体験がいまだに影を落とす。気丈な彼女は家族に心配をかけまいと心の奥にしまっていたのだ。母親は娘の様子に気をもむが、来日からの年数が経つにつれて、親子の会話が成立しなくなっており、どうしてよいかわからない。

スクールカウンセラーに頼んで彼女の気持ちを聞いてもらい、さらにその思いを通訳の方から母親に伝えた。やっとのことで娘の気持ちを理解した母親は涙を流し、娘を抱きしめた。学校生活に慣れ、日本語が話せるよう



になると、かえって家庭での会話が成り立たなくなる。こんな皮肉な現実にも彼らは向き合わなければならない。

また中国で育ち、小学生になってから日本に帰国した女子生徒は「今、中国と日本の関係が悪いので、文化活動発表会で中国のことを話すと、何か言われるかもしれないからあまり話したくないです」と言う。そんな会話が何気ないおしゃべりの中で語られているのである。

#### (4) 他の生徒への関わり

外国の文化を知ってもらおうということだけで年に2回、外国料理を作ってふるまう機会をもっている。ブラジルのパステウ、上海春巻、今年は「部活動激励会」に合わせてコシーニャ(ブラジルのコロッケ)を作り、各部活動の生徒に届けた。

「試合頑張ってください」

「ありがとう！がんばります！」

そんなやりとりが交わされ、喜んでくれる様子に、多文化研究会のメンバーも大いに意気が上がった。料理の指南役に保護者が来てくださることもあり、忙しくも楽しいひとときとなっている。



▲ ブラジル料理で激励

また、「多文化研究会」の発足のきっかけとなった「文化活動発表会」での発表も今では

文化部の発表として恒例のものになった。昨年は「ワールドトラベル」と題した母国の紹介を劇仕立てにした。今年は「日本での等身大の自分たちの学校生活をアニメで表現したい」と意気を上げる。「脚本を書いてくる!」「マンガは私!」とお祭り大好きなブラジル籍生徒と、マンガ大好きな中国育ちの生徒に引っ張られつつも、「勉強もちゃんとしなさい!」と顧問が釘をさすなど、わいわいにぎやかな部室での一コマである。



▲ 全校生の前で思いを表現する  
(昨年度の文化活動発表会にて)

## 4 おわりに

日本語指導が必要な生徒へのやさやかな本校の実践を紹介させていただいたが、学校としての取組はまだまだ緒に就いたばかりである。

生徒の中には、自分のルーツに目を向けられずにいる者や、活動に意義を見いだせずに遠ざかっていく者もいる。地域の小学校や中学校とも連携し、彼らの地域での関係づくりや、地域で育ちを見守ってもらえるセーフティネットづくりも必要になってくるだろう。

外国からやってきた彼らのアイデンティティが輝きを放ち、本校の豊かさにさらなる味わいを加えてくれるような、そしてそこから豊かな育ちや学びが得られるような取組を息長くしていきたいと考える。